

私的言語論におけるウィトゲンシュタインの一つの声：243 節の読みを手がかりにして
A Wittgenstein's Voice of the Private Language Argument : By Using the Readings of §243

佐伯優輔

Abstract

Ludwig Wittgenstein's text, *Philosophical Investigations*, has been interpreted in a variety of ways. In particular, the private language argument has attracted much attention. Orthodox interpreters hold that the argument leads to the impossibility of private language. This article examines two readings of §243, "substantial reading" and "resolute reading". In these readings, there is a difference in drawing Wittgenstein's respective positions. But the difference is not essential, if it does not affect the conclusion of private language argument. Finally, in respect of two readings, this article indicates where Wittgenstein's voice should be heard in *Philosophical Investigations*.

(1) 研究テーマ

ウィトゲンシュタインが著した『哲学探究』（以下、『探究』）は、文法・規則・規準と徴候・生活形式といった様々な概念を考察しているので、数多の議論をうみ、多様な解釈がなされてきた。たとえば、私的言語論と呼ばれる 243 節からなる一連の節についての議論がそれにあたる。これまで私的言語論は、その帰結が私的言語という概念の不可能性を示していると解釈されてきた。換言すれば、心を私的領域として物象化し、その物象化した対象を指示するような言語が想像できないことを示していると解釈されてきた。この解釈により、認識論や心の哲学などの諸哲学に影響を与えると主張されるだけでなく、「私的言語は可能か否か」という論争もなされた。

本稿は、私的言語の可能性も不可能性も論じない。ここで主題とするのは、243 節に関する二つの読みを検討し、私的言語論におけるウィトゲンシュタインの立場を明確にすることである。そのために、243 節についての「実質的な読み [substantial reading]」と「断固たる読み [resolute reading]」の違いを確認したのち、その違いが私的言語論に影響を与えるのかを考察する。そして本稿では、「断固たる読み」の帰結が私的言語の不可能性を覆すものではない限りにおいて、両者の読みの違いが本質的なものではないと結論づける。他方、「断固たる読み」が採用する方法論を参考にして、243 節を対話形式ではなく自己問答としてみる見方も示す。それにより、ウィトゲンシュタインが私的言語の不可能性を主張していないとする読みを提示する。

(2) 研究の背景・先行研究

私的言語という概念は、243 節における定義から始まる。そこが私的言語論の導入である。243 節に対して異なる二つの解釈がなされており、そうした解釈間の相違点を確認するために、以下で該当箇所を参照する。

甲：ところで、ひとが自分の内的体験—自分の感情や気分など—を自分用にかきとめたり、発したりできるような言語は考えられないのだろうか。

乙：そうしたことは、我々のいつもの言語でできるのではないか。

甲：いや、そういうことではない。この言語に属する語は、その話し手のみが知りえるもの、つまり話し手の直接的で私的な感覚を指示するのだ。それゆえ、他人はその言語を理解できない。ⁱ

引用文中には、二つの異なる立場（ここでは、〔甲〕と〔乙〕とする）が登場しているⁱⁱ。どちらをウィトゲンシュタインの主張だと捉えるかで、見解の相違がある。

第一に、〔甲〕をウィトゲンシュタインとみなせば、その問いかけから私的言語論が始まる。まずウィトゲンシュタインは、当人の内的体験をその人自身のためだけに表すような言語の想定可能性を問う。この仮定について対話者は、日常的に使われる言語で可能だと反論する。たとえば、誰にも内緒の手記に「痛い」と書くなどのことが考えられるだろう。だが、ウィトゲンシュタインは厳密な定義を示すことでその反論を退ける。というのも、ここで私的言語として想定する言葉とは、その話者の直接的で私的な感覚のみを指し示すものであるためだ。その言葉が指し示すものは当人しか知りえないので、いかなる相手もその言葉を理解することができない。すなわち、その言語使用のうちに他人が登場することは決してない。そのため、その言語使用が人々の間で一致しているかどうかを問うこともない。したがって、もしそのような言語が想定可能であれば、「定義や判断における一致（厳密には一致の可能性さえ）、それは言語の概念そのものとは内的関係にない」（Hacker 2019, p. 15）ことになるⁱⁱⁱ。

このような読みは、「実質的な読み〔substantial reading〕」と呼ばれる。なぜなら、243節以降の議論が、言語の有意味性について実質的な見解を導出すると読み解くからだ。端的に言えば、「私的言語は不可能である」という見解を導くために、「私的言語は可能である」ことを仮定し、その概念上の矛盾を指摘しているとする読みのことである。「もし我々が243節の最初の（実質的と呼ばれる）読みに従うならば、最も有名な後続の諸節—244、246、253、258節—とは、対話者の直前の文における語の意味を考慮して、対話者がそれらの語から組み立てようとする私的言語という考えは無意味か支離滅裂でなければならず、文法違反であることを、ウィトゲンシュタインが示す箇所となる」（Mulhall 2008, p. 18）。マルハルも言うように、後続する各節は「指示する」や「私的」といった語を我々がどのように使用するかを示して、それらの語に関する文法を浮き上がらせる^{iv}。たとえば、「感覚は私的である」とは経験命題ではなく、文法命題であり、「感覚は当人のみが知っている」とは「知る」という文法に違反した一例である（246-8節、251節）。そして、私的な直示的定義では指示対象の同一性を保証するための正当化ができないことを論拠として、その言語を正しく使用できていないことが示される（258節）。したがって、「私的」や「指示する」などの語を頼りにして私的言語を想像しようと目論むと、言語としての使用の場を失うので、私的言語は不可能であると結論づけられる。

このように私的言語とは、243節の定義に沿って構成される限り、概念上の困難に陥る。もし私的言語が有意味な言葉だとすれば、その語は他人にも理解可能であるため、その定義と齟齬が生じる。だが、内的体験の私秘性を保持し続ける限り、無意味な言葉の羅列にすぎない。なぜなら、そこには有意味性を保証するような基準が存在しないためだ。そうというのも、その使用の正しさは同一の対象によって正当化されており、「私に正しいと思われるものは何でも正しい」（258節）とされるからだ。それにもかかわらず、我々が内的体験の私秘性を言語で表現可能だと考えてしまう一因は、現実の言語使用の場から離れて特別な使用の場を想像してしまうところにある。「実質的な読み」において、ウィトゲンシ

ュタインが文法的諸条件を明らかにしたことを強調するならば、文法違反へと我々を誘う言語観からの解放を試みるような議論として、私的言語論を読むことになる。

第二に、〔乙〕をウィトゲンシュタインとみなせば、対話者の問いかけに対して、ウィトゲンシュタインがそのような想定は普段使用されている言語で可能だと応答していると読める。むしろ自分自身の内的体験に言葉を当てはめることの成立可能性が疑われるなどあるのかと問い直している。だが、対話者は私的言語に形式を与え、その試みを説明する。

このような読みは、「断固たる読み〔resolute reading〕」と呼ばれる。なぜなら、ウィトゲンシュタインが私的言語という考えを断固として拒絶していると読み解くからだ。換言すれば、「私的言語は可能か不可能か」とは議論するまでもなく、「その概念自体がナンセンスである」という答えが一貫して示唆されているとする読みのことである。というのも、その読みでは、「私的」という概念と「言語」という概念とは両立不可能だという前提が暗に置かれているためだ。「もし我々が 243 節の第二の（断固たると呼ばれる）読みに従うならば、これらの後続する諸節とは、対話者の定式化を構成する用語に意味を与える方法を、ウィトゲンシュタインが想像し、試行しようとする箇所として立ち現れる」（Mulhall 2008, p. 18）。マルハルによれば、後続の各節にて、ウィトゲンシュタインは私的言語を定式化しようとする試み、その構成要素としての語が意味をもつのかを検討している。そうというのも、243 節で対話者は日常の言語で表現するという方法を否定するのみであり、私的言語を表現するための具体的な方法に関して一切言及していないからである。そこで、後続する各節にて感覚語を発明する天才児（257 節）や、いわゆる「感覚日記」（258 節）が想定される。けれども、いずれの試みも対話者を納得させるに至らない。「そうした試みに対する対話者の暗黙の応答が、243 節における最初のウィトゲンシュタインの試みに対する対話者の応答を、すなわち『いや、そういうことではない』を繰り返す限りにおいて」（Mulhall 2008, pp. 18-9）、その定義に内容を与えることはできない。

しかしながら、そもそも対話者の問いは成立するのだろうか。対話者は自分自身の言葉によって特別な何かを表現可能だと確信している一方で、現に使用している自分自身の言葉を疑問視しているからだ。つまり、私的言語という形式において特別な意味をもつ言葉を使用可能だと考えていると同時に、その想定例が既存の文法に依拠した言葉では表現不可能だとするからだ。あたかも対話者は、世界のどこかに既婚の独身者がいることを信じているようだ。だが、ある人が既婚者であり、かつ独身者である場合などありえようか。同様に、いかなる文法にも属していない言語というものを我々は想像できようか。

(3) 筆者の主張

これまで 243 節についての二つの異なる読みを検討してきた。この違いは私的言語論の解釈にとって注意を払うべき関心事なのであろうか。すなわち、その違いは私的言語論に関する本質的な争点だと言えるのか。このことを考察するにあたり、私的言語論の本質的な特徴をみていくとしよう。以下は、正統派解釈者たちが私的言語論の前提であると受容してきた点である（Stern 2011, p. 335、括弧内引用者）。

- (1) その議論（＝私的言語論）は、私的言語の性質についての前提もしくは諸前提から始まる。
- (2) その議論は、そのような言語が不可能であるという結論を導いている。
- (3) その結論は、哲学全体に対して広範囲な影響がある。

- (4) その議論は、『哲学探究』で完全にも明確にも述べられていないとはいえ、演繹的な背理法の議論として理解すべきである。

上記のうち、前提(4)を拒絶するような解釈をスターンは示し、その解釈を「ピュロン主義的な読み」と呼ぶ (Stern 2011)。

「ピュロン主義的な読み」によると、「ウィトゲンシュタインの主要な狙いとは、私的言語に関する非常に特殊な概念が矛盾を導くという議論を与えることではなく、むしろ私的言語という考えそのものが首尾一貫して定式化できないことを読み手に分からせること」 (Stern 2011, p. 340) にある。言い換えれば、その読みでは、私的言語という想定は矛盾を生むゆえに不可能だという議論が展開されていると解釈するのではなく、むしろ私的言語という考え自体が断固として定式化できないものだとして解釈する。さらにスターンは、「正統的な読み」と「ピュロン主義的な読み」という対比を、「実質的な読み」と「断固たる読み」の対比へと当てはめる (Stern 2011, pp. 346-7)。そして、「断固たる読み／ピュロン主義的な読み」のように私的言語論を読み解くことが、通説である「実質的な読み／正統的な読み」に取って代わる解釈であると指摘する (Stern 2011)。

スターンによれば、「断固たる読み／ピュロン主義的な読み」とは簡潔に、「正統的な方法論を拒絶するだけでなく、ウィトゲンシュタインの主要な狙いが、**私的言語という考えが矛盾を導くというのを演繹的に証明することにあるという前提も拒絶する**」(Stern 2011, p. 335、強調引用者) とある。それゆえ、スターンは次のように言っている可能性がある。すなわち、「断固たる読み／ピュロン主義的な読み」とは、先に引用した正統派解釈者たちが受容した諸前提のうち、(4)以外の前提を拒絶するものではない、と。もしそうであれば、「断固たる読み／ピュロン主義的な読み」は私的言語論の結論についての前提を拒絶していないことになる。したがって、あくまでスターンは、結論に至るまでの過程の違いを強調しているかもしれない。いずれの読みも、私的言語と呼びたくなる何かに使用の場を与えられないという結論へ到達するのには変わらないからだ。マルハルも指摘するように、「その結論に到達する過程をどちらの方法で我々が劇的に表現するかに重要な違いがあるかどうか」 (Mulhall 2008, p. 20) が論点となる。しかし、そこには重要な違いなどあるのだろうか。無論、私的言語論の核心をその結論にみてとるならば、その違いはまったく重要ではない。そして、これまで 258 節を含む特定の節に対する解釈が集中してきたのは、その議論の核心が私的言語の不可能性にあると考えられてきたからだろう^{vi}。そうだとすれば、過程における差異とは些末なものだと言える。

また、そうした方法論の違いに注意を向けたとしても、どちらの読みがウィトゲンシュタインの主張に忠実か否かを決定づけることはできない^{vii}。そのため、一方の読みを受け入れることが、もう一方の読みを直ちに拒絶するわけではない。そもそも「ウィトゲンシュタインと対話者」という構図それ自体も確立すべきでないかもしれない。というのも、ウィトゲンシュタインの自問自答として、いわば連続した一つの声として再解釈できるかもしれないからだ^{viii}。このことは、二つの異なる読みのどちらに従うとしても、その議論の核心である結論部分に影響を与えないことが裏付けている。それゆえ、243 節の〔甲〕と〔乙〕のどちらの立場にウィトゲンシュタインを見出しても誤りではない。いずれもウィトゲンシュタインの主張の一側面にすぎないので、どちらの読みが忠実であるか否かという見方も成立しえない。問いかけることと、その問いに答えることとは必ずしも他人を必要とするわけではない。したがって、ウィトゲンシュタインが問いかけて、その問いにウィトゲ

ンシュタインが答えていると考えてもよいはずだ。

他方、ウィトゲンシュタインの連続した一つの声という読みを支持するためには、「断固たる読み／ピュロン主義的な読み」が採用した方法論に着目し、両者の読みの違いを再認識すべきかもしれない。それだけではなく、二つの異なる読みのどちらに従うとしても、私的言語の不可能性は主張されているという見解を破棄する必要もある。というのも、「断固たる読み／ピュロン主義的な読み」の「定式化できない」(Stern 2011, p. 340) という文言をどう捉えるかで、これまで検討してきた二つの読みは本質的に同じかどうかが決まるからだ。仮に、その文言を私的言語の不可能性の主張として受け取るならば、「不可能である」と「定式化できない」は単なる表現上の違いにすぎないため、いずれの読みも同等である。だが、その文言を字義通りに受け取るならば、私的言語の不可能性は主張されていないこととなる^{ix}。なぜなら、定式化できていないものに問いを立てることはできず、ゆえに、肯定も否定も回答できないからだ。つまり、私的言語は可能であると言えず、ましてや私的言語は不可能であるとも言えない。もしそうであれば、その読みは「(2) その議論は、そのような言語が不可能であるという結論を導いている」(Stern 2011, p. 335) という正統派解釈者たちの前提も拒絶しており、二つの読みは決定的に異なると言える。

そして、そのような読みを「ピュロン主義的」と形容するならば、ウィトゲンシュタインは相反する立場のいずれも支持しておらず、どちらが正しいのかという判断を保留し、私的言語に関するいかなる断言も避けようとしていると解釈すべきである。そのような態度はまた、別の節における記述からもうかがえる。『探究』において「私的言語」という語はほとんど登場しないものの^x、269 節では、「他人は誰も理解しないが、しかし、私が『理解していると思われる』音声を、『私的言語』と呼べるかもしれない」(269 節、強調原文イタリック) とある^{xi}。この節で注目すべきは、私的言語についての見解を断言していないことにある。「呼べるかもしれない」という曖昧な言い回しであり、議論の余地を残しているように見受けられる。

節番号のみが振られた『探究』本文の記述方法は、書物全体の目的はおろか、各節ごとの関係や方向性さえも曖昧に留めておくのに有効である。だからこそ、書かれたことをどう受け取るかは読み手に委ねられている。つい我々が、語り手の声を書き手であるウィトゲンシュタインの声として直ちに同定しようとするのは、平叙文と主張文とを混同するからである。けれども、仮に 243 節をウィトゲンシュタインの自問自答として再構成できるならば、いずれの立場もウィトゲンシュタインと同定すべきではない。つまり、いずれの文中にもウィトゲンシュタインの主張は現れていないと解釈すべきだ。その主張は、肯定文と否定文とを超えたところにある^{xii}。したがって、ウィトゲンシュタインは私的言語が可能であるとも言っておらず、私的言語が不可能であるとも言っておらず、そこでは何も語ってはいないのだ。

(4) 今後の展望

以上より、243 節に関する二つの読みとは、私的言語論の要点である私的言語の不可能性という結論に影響を及ぼすような違いでない限りにおいて、本質的とは言えない。だが、243 節をウィトゲンシュタインの一つの声として読み解くならば、ウィトゲンシュタインは私的言語の不可能性を主張していないと解釈できるので、両者の読みの違いが重要となる。独特な形式で書かれた『探究』において、ウィトゲンシュタインの立場をどこに見出すべきかについて深い見解の相違がある。しかしながら、ウィトゲンシュタインの主張が文中

で語られていることを前提として、平叙文を主張文と即座に判断するのは得策ではない。本稿の読みに従うならば、肯定文と否定文とを重ねた先に、ウィトゲンシュタインの主張が消極的にあらわれているはずだ。このような読みは、『探究』のいくつかの節でのウィトゲンシュタインの位置づけにひとつの視座を与えるかもしれない。

しかしながら、『探究』のいくつかの節は、かつてのウィトゲンシュタイン自身を含んだ論敵が明らかに想定されているため、そうした節の記述を主張文だと認めざるをえない。とはいえ、ある記述をウィトゲンシュタインの主張とみなし、別の記述を論敵の主張とみなすためには、そこで想定されている論敵の主張に一致するであろう内容を、その論敵の著作から援用できなければならない。つまり、『探究』の仮想敵が実際にそう述べているということを、『探究』以外の著作によって裏付けなければならない。そのためには、『探究』での論敵の主張と、『探究』以外での論敵の主張との類似点や一致を明確に示す必要がある。それにもかかわらず、ロックやデカルト、フレーゲやラッセルといった他の哲学者たちが、原著に言及されることもなしに、『探究』の仮想敵として扱われることは少なくない。私的言語論も例外ではないⁱⁱⁱ。無論、そうした解釈が誤りであると断定したいわけではない。そうではなく、いくつかの節において、ウィトゲンシュタインが他の哲学者を念頭に置いて批判していると解釈するためには、その哲学者の著作もまた参照すべきであるということだ。けれども、本稿では、ウィトゲンシュタインと他の哲学者とを比較する解釈について言及するに至らなかった。したがって、こうした点を今後の課題としたい。

注

ⁱ この引用は、『探究』243節による。とはいえ、改行と補足は、引用者が後述の内容を分かりやすくするために、あえて行っている。また本稿では、節番号のみが記載されている場合、『探究』からの引用であることとする。訳は引用者によるものである。

ⁱⁱ 『探究』の何節かは、一方をウィトゲンシュタインとして、他方を対話者として対話篇のように読み取られることがある。たとえば、(飯田 2005, pp. 248-9)はその一例である。

ⁱⁱⁱ 言語の概念と人々の一致とが内的関係にあると主張されるのは、言語が成立するためには複数人による使用が必須であると解釈されるからだ。この解釈では、規則論の帰結がすでに私的言語の不可能性を含意していると考え、(Kripke 1982)がその代表例である。同様の指摘は、(野矢 2022)にある。

^{iv} ウィトゲンシュタインのいう「文法」とは、いわゆる日本語の文法とは異なる。詳しくは、(野矢 2022, pp. 139-142, p. 188)などを参照されたい。

^v (Stern 2011, p. 333)に、具体的な論者が示されている。

^{vi} これまで258節などの特定の節に対する解釈が集中してきたという指摘は、(Stern 2011, p. 338)にある。

^{vii} 同様の指摘は、(Mulhall 2008, p. 20)にある。

^{viii} スターンも、「ウィトゲンシュタインと対話者」という見方を批判している。しかしながら、スターンは二つよりも多くの声が存在すると言う (Stern 2011, p. 338)。

^{ix} 大谷によれば、ウィトゲンシュタインが目指しているのは、「私的言語は想像不可能である」という決定的論証を与えるのではなく、「私的言語」という像を明確化し、吟味することにある (大谷 2020, pp. 162-6)。スターンもまた、(Stern 2011, p. 339)などで同様の主張をしているように思われる。そうとはいえ、スターンの主張は曖昧である。なぜなら、「ピュロン主義的な読み」が前提 (2) も拒絶するとは明言していないからだ。さらには、ピュロン主義の伝統を最初に説明している箇所は、前提 (4) に関する論述であり、一見すると前提 (2) とは無関係であるように思われるからだ (Stern 2011, pp. 338)。

- ^x 「私的言語」という語が登場するのは、259 節、269 節、275 節のみである。
- ^{xi} 中村は、269 節で私的言語と呼ばれるものに具体例を与えたうえで、その語が言語の場に登場しないと指摘している（中村 2021, pp. 150-3）。
- ^{xii} スターンは、「ひとはそこで、『私に正しいと思われるものは何でも正しい』と言いたくなるかもしれない。そして、それは、ここでは『正しい』ということについて語れない、ということにほかならない」（258 節）という箇所に対して、「ウィトゲンシュタインの締め言葉は、私がそのような基準をもてるかもしれないという考えそのものへの強固な拒絶として読むべきだ」（Stern 2011, p. 350）と言っており、その二文をウィトゲンシュタインの主張とみなさないどころか、258 節のうちにウィトゲンシュタインを見出していないように思われる。
- ^{xiii} たとえば、ウィトゲンシュタインは私的言語の不可能性を示すことによって、デカルトが前提としていた心の像を否定していると簡潔に語られることもある。このようにデカルト批判として私的言語論を説明するのは、一般的な解釈として受け入れられてきた。詳細に関しては、（Stern 2011, p. 336）や（伊藤 1995, pp. 167-8）を参照されたい。しかしながら、ウィトゲンシュタインとデカルトをそもそも同じ土俵で比較できるとは限らない。たとえば、伊藤は『第二省察』などを援用することで、私的言語論における内的体験はデカルトの観念説における観念や思考とは異なると指摘する（伊藤 1995, pp. 169-70）。つまり、そもそも心の捉え方がウィトゲンシュタインとデカルトでは異なるため、ウィトゲンシュタインを単純な反デカルト主義とみなせないと述べている。

(5) 参考文献

- Hacker, P.M.S. 2019, *Wittgenstein : meaning and mind*, Wiley Blackwell.
- Kripke, S. 1982, *Wittgenstein on Rules and Private Language*, Harvard U. P. (クリプキ, A. 黒崎宏訳, 2022, 『ウィトゲンシュタインのパラドックス：規則・私的言語・他人の心』, 筑摩書房.)
- Mulhall, S. 2008, “Wittgenstein’s Monologuists (§243)”, *Wittgenstein’s Private Language : Grammar, Nonsense, and Imagination in Philosophical Investigations*, §§ 243-315, Oxford University Press, pp.16-22.
- Stern, D. 2011, “Private Language”, Kuusela, O. & McGinn, M. ed. *The Oxford Handbook of Wittgenstein*, Oxford University Press, pp. 333-50.
- Wittgenstein, L. 2009, *Philosophical Investigations*, revised 4th ed. Hacker, P.M.S. & Schulte, J. eds. Wiley-Blackwell. (ウィトゲンシュタイン, L. 鬼界彰夫訳, 2020, 『哲学探究』, 講談社.)
- 飯田隆, 2005, 『ウィトゲンシュタイン：言語の限界』, 講談社.
- 伊藤邦武, 1995, 「デカルト批判・私的言語の議論」, 飯田隆編, 『ウィトゲンシュタイン読本』, 法政大学出版局, pp. 167-180.
- 大谷弘, 2020, 『ウィトゲンシュタイン 明確化の哲学』, 青土社.
- 中村昇, 2021, 『続・ウィトゲンシュタイン『哲学探究』入門』, 教育評論社.
- 野矢茂樹, 2022, 『ウィトゲンシュタイン『哲学探究』という戦い』, 岩波書店.
- (中央大学)